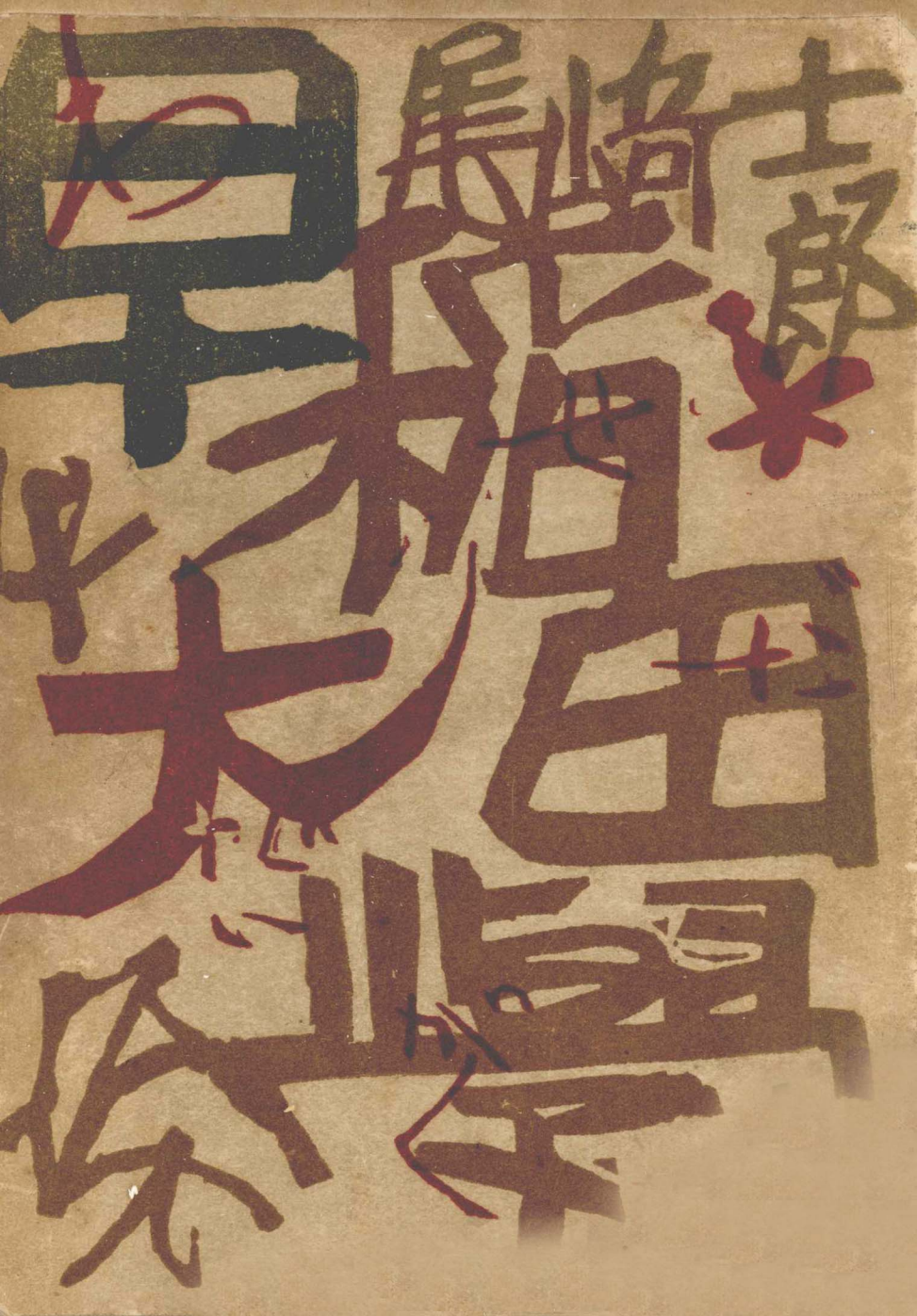
日本相撲協會

日本稻田史導

尾崎士郎

昭和28年10月20日初版
昭和28年11月15日再版

早稲田大學

定價180圓
地方賣價190圓

著者　尾崎士郎
發行者　鷲尾洋三
印刷者　淺野剛

本文　金羊社
表紙扉　求龍堂
製本　矢島製本

東京都中央區銀座西5の5
發行所　文藝春秋新社
振替東京 78743

亂一落丁亂丁がありましたら小社でお取換致します
Printed in Japan

凡例

一、私は少年時代から大隈重信が好きである。彼に取材する歴史的小說を書くことは、この數年來の計畫の一つであり、「早稻田大學」は、その重要な骨骼を示すべきものである。昭和二十七年十月、早稻田大學創立七十周年にあたり、この作品の完成がこれと軌を一にしたことは、作者の尠からず愉快とするところであるが、しかし、この作品執筆の動機は、學校側の要請によるものではない。正確にいへば、むしろ作者の要請に對して、渡邊幾次郎、河竹繁俊兩教授から示唆をあたへられたことと、先輩丹尾磯之助氏から材料の提供をうけたといふにとどまる。特に丹尾氏の盡力と、激勵なくしてはこの作品の脫稿は困難であつたらうと思ふ。特に感謝の意を表したい。

一、「學校騷動」は「早稻田大學」に隨從して成つた作品であるが、大正六年に發生したこの騷擾には作者もまた一學生として關與してゐるので、これを歴史的事件として取扱ふためには取材に伴ふ環境がなまなましすぎた。登場人物が實名と假名と別々になつてゐる。最初はすべてを實名によつて統一したが、小說として虛構された部分もあり、それが現存の人物に迷惑を及ぼすことを避けようとする意圖のためである。しかし、それがために事實の解釋に作者の意識を加へたといふことはない。鹿を追ふ獵師山を見ず、といふ言葉があるが、私は當時まだ二十歳になつたときで、子供の世界から、やつと足を踏みだしたばかりである。一介の乳臭兒に複雜にして表裏唯ならぬ人間關係はもちろん、政治的情勢なぞのわかる道理はない。私は一方的認識の上に立つてゐる自分の解釋を補正するために、この事件に關與した諸先輩の意見を求めた。これを綜合した上で自分の認識に還元すると、そこにはじめて納得のできる狀態が生れてくる。現存する事件關係者の名前で、特にこれを明白にすべき必要のないものはすべて變名を用ゐた。ある時期において當然實名にすべきものであるが、小說として特に實名

を用ゐる必要を感じなかつたからである。

一、「大隈重信」を「早稲田大學」と改題したのは、文藝春秋編輯長車谷君の要請に應じた結果である。私としてはどつちでもいいが、自分の立場からいへば「大隈重信」の方がぴつたりする。それに、「早稲田大學」といふと、私が現代の早大出身の文學者を代表して母校の歴史を描くがごとき觀を呈してくるが、私にそのやうな意圖の微塵もないことは明白であり、もし、さう考へる人間があるとしたら滑稽至極である。私は、ある意味において早稲田の反逆兒であり、在學三年にして除籍された。言はば早大出身の不良學生である。現在は校友のはしくれに名を列してゐるが、往事を回想すれば一種妙な氣持でもある。これを特に大書したいのは讀者諸君のあひだに萬が一、私が早大出身の秀才であつたといふがごとき誤解の發生することを防ぐとともに、早大出身の文學者並びに文學志願者を安心させたいためでもある。私は私の「早稲田大學」を書くのであるから諸君は諸君の「早稲田大學」を書いたらよろしい。私が政治經濟科の出身で文科出身でないことも此處に一言しておきたい。

一、「風蕭々」は「早稲田大學」の後半にある霞ヶ關事件に取材した作品である。これは刺客、來島恒喜の立場から執筆したもので、これは頭山滿翁在世中、玄洋社故老一致して、あらゆる素材を提供され、これがために私は福岡を數回訪れて、史實の正確を期した。

昭和二十八年十月

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

早稲田大學 9
學校騒動 75
風蕭々 141

早稲田大學について 199

滋　山初　幀裝

早稻田大學

早稻田大學

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

新秋の一日、――私は大隈會館の庭園の中を歩いてゐた。午後の空が曇つてゐるせゐか、手入れの行きとどいた庭園でありながら、何となく荒廢したかんじが視野の中にあふれてゐる。昔は樹立のふかい、雅趣のゆたかな庭であつた。時代とともに錆びついた色彩が、チラチラと記憶の底からよみがへつてくるだけに、今はあとかたもなく變りはてた、がらんどうの廣場をゆびさしながら、此處が昔は落葉に埋もれたほそい道で、老侯爵は毎日必ず食後の散歩をされるのが習慣になつてゐました、――と、自信にみちた調子で語りつづけるN氏の聲から、私は何の印象をさぐりあてることもできなかつた。

戰災で燒け落ちたあとに、「大隈會館」と呼ばれてゐる、あたらしくつくられた集會所式の建築が、私の記憶の中に殘る古色蒼然たる庭園の風致と調和してゐないためでもあつた。

昔は底の知れぬほど宏大であると思つた庭が、これほど小ぢんまりとした寸の詰つた地域に限られてゐることにさへ私は先づ驚愕の眼を瞠つた。まだ季節は九月も半ばをすぎたばかりで風のつよい日であつたが殘暑はしつとりと大氣の底にねばりついてゐる。雲は低く垂れさがつてはゐたけれども、しかし新秋の爽かさは、ときどき、しいんと身うちに迫るやうであつた。庭園の周圍にあつた杉の並木も、ことごとく戰災のために枯れつくして、昔ながらの形をとどめてゐる樹木なぞは一本も殘つてはゐないといふのだから、荒廢のかぎりをつくしたものらしい。その燒あとの中から、これだけの原形をさぐりだすことさへ容易な仕事ではなかつたかも知れぬ。

その日の午後、私は新橋驛から自動車を走らせ、正門前らしいところで車をとめると、すぐ本部に、あらかじめ打合せのしてあつたN氏を訪ねた。N氏は三十年前、私の在學時代の先輩である。私はN氏の案内で、正午すぎのひとときを、足にまかせて校庭の内部を彷徨ひ歩いた。歩きながら私の心はたちまち幻怪な思ひに打ちのめされた。私の記憶の底に三十年間いつも同じかたちで夢のやうにたたみこまれてゐる學校のすがたは、もはや影さへも殘してはゐない。私は數年前、久しぶりで矢來坂上にあるS出版社を訪れ、その歸りみちに何の計畫もなしに、わざわざ自動車を遠廻りさせて學校の前を通りすぎたことがある。季節はちやうど今と同じ九月であつたが、おそらく懷舊やる方なしといふ思ひに唆られたものであらう。正門の前に自動

車を待たせ、ふらふらと校庭の中へ足を踏み入れたとたんに、私は奇妙な光景にぶつかつた。三十年間、母校の校庭を歩いたことのない私にはもはやどこに何があるのか見當のつくべき筈もなかつた。門を入つたときから何か唯ならぬ氣配をかんじてゐたが、正面の教室らしい大建築の正面に演壇が設けられ、小柄な一人の學生が何かわめくやうな聲で叫んでゐた。

その前には「レッド・パーヂ反對」と大書したプラカードを持つた學生が列を組んでならんでゐた。學生の數は多く見つもつても二百人か三百人程度と思はれたが、この一團の學生の周圍に、雜然と入りみだれた群集（もちろん彼等も學生であつたが）が立つてゐた。正面に整列してゐる學生の一隊と彼等をとりかこんでゐる雜然たる群集とのあひだには、一見しただけで、ぬきさしのならぬ感情の距離があり、ひた向きな正面の一隊とくらべると群集の表情はほとんど無感動といつてもいいほど低徊的であつた。

演壇に立つてゐる指導者らしい男の聲は私の耳にはよく聽きとれなかつたが、一段落つくごとにプラカードがうごき、それにぴつたりと調子を合せたやうに、整列してゐる學生の列から、わあつと嵐のやうな叫び聲が起つた。私は群集の列を押し分けるやうにして前へ出ていつた。演壇の兩側には、生徒監ともつかず、教授ともつかぬ中年の背廣服を着た紳士が立つてゐる。近づくにつれて、彼等の顏には、この殺氣立つた空氣と結びつくことのできないやうな、冷たくこちんとした感情が翳のやうに沁みついてゐることがハッキリわかつた。演壇に立つて、煽

動演說をやつてゐる男は、自分の聲に響きのないことがもどかしくてたまらないらしく、絶えず上體をはげしくゆすぶりながら、しきりに聲を張りあげようとしてゐるが、しかしいくらあせつても彼の聲は中途でかすれてしまふ。私は片手で頭をおさへながら、ぢつと彼の聲に耳を澄ました。

「諸君、學校は學生の學校である、學生は自由に教室に出入する權利がある、その教室の使用を禁ずるとは何事であるか、――われわれはこの横暴なる學校當局に對して」

そこまで聞いたとき、私は妙な氣恥かしさのために、われ知らず胸がきゆうんと締めつけられた。妙な、――といふのは、この青年の聲の中に三十年前の自分の姿をぼうつと思ひうかべたからである。しかし、今、私の前で廣場の正面に列をつくり、スクラムを組んで恰かも組織された軍隊のやうに整然と隊伍を整へてゐる學生の表情は一定の法則を保つて硬化してしまつてゐるやうに見える。私の耳に聞えた言葉は三十年前とほとんど渝るところのない響きをもつ同じ言葉であつたにしても、しかし、この雰圍氣はあまりにも冷たく陰慘であつた。彼等の集團の上にうかびあがつた表情の中には、もはや三十年前の學生生活を彩る底のぬけた明るさもなければ、無際限にひろがつてゆく青春の、野放圖な動きさへもない。むしろ、一種の律儀といつてもいいほど小さな枠の中にとぢこめられた感情の神經的な動きを見るだけである。立つてゐるうちに次第に切なく、味氣ない思ひにうちのめされてゆく私のうしろから、そのときだ

しぬけに異樣などよめきが起つた。慌てて振りかへつてみると、ひとりの背廣服の男が數人の學生に兩腕をおさへられて、ぐいぐいと力まかせにひきずられながら、前へ前へとおし出されてゆくところなのである。

あゝ、そこにも三十年前の情景が同じ翳をうかべてゐる。今まで默々として傍觀してゐた群集は急に活氣づいたやうに動きだした。背廣服の男はおそらく學生に僞裝した刑事なのであらうか。すると、演壇に立つてゐた指導者らしい男が、またしても咽喉からしぼりだすやうな嗄れた聲で何か叫んだと思ふと、正面に陣どつてゐた一隊が、スクラムを組んだまま前へ進んでゆく。

私はもはや、そこに居たたまれない氣持ちで自動車を待たせてある正門の方へ引つかへした。一瞬にして消え去つた情景ではあつたが、私が眼のあたり見たものは、伸びやかな夢を孕む學生生活が自然にかもしだす「青春の場」へ、何の遠慮もなく土足で踏み込んでくる陰鬱な政治の足音である。夢と香りにみちた若さのひとときを根こそぎに奪ひ去つてゆく、骨組のがつちりとした大人の表情である。私は時の變化をこれほど心に沁みてかんじたことはなかつた。

私はともすればチグハグになる自分の感情を、一つの方向にねぢ向けたまま、N氏の案内で校庭の中を足にまかせて歩きながら、今や私の記憶の外へ完全にはみだしてしまつてゐる宏壯な建築を眩しい思ひで仰ぎ見るのである。

輪奐の美、――といふほどではないにしても、これが私の若き日をすごした學校だとはどう

しても考へることのできないほど、今日の「早稲田大學」は堂々たる外觀を備へて聳えてゐる。私は、母校といふ感情につながる、さまざまな色彩や形や、きらめくやうな思ひ出とはまつたく緣もゆかりもなくなつてしまつてゐるやうな、遠いところへ來てしまつたといふ感懷にうたれた。

變つてゐないのは私の上級生だつたN氏の顏だけで、どの建築にも見おぼえのある筈はなく、擦れちがふ學生たちの、精彩にみちた若々しい顏にぶつかると私はどきつとして胸をときめかすのである。どの顏にも彼等の表情をかすめる、あたらしい時代の翳が、何の淀みもなくくつきりとうかびあがつてゐる。どこを歩いても私にとつては結局同じことであつた。私の記憶では正門を入るとすぐ左側に靑いペンキの剝げ落ちた木造二階建の講堂があり、その橫に田舍の中學校の雨天體操場を思はせるトタン屋根の學生控所があつた。敎室といふ敎室は木造の二階建で、唯一つ、小高い丘の上から赤い煉瓦のあたらしい色を湛へて嶄然とうかびあがつてゐた恩賜館の建築も、今はどこにあるのか見當もつかぬ始末である。

その頃は正門から少しはなれて高等豫科の門があり、その門が小さい通路をへだてて鶴卷町の一角を領有してゐる大隈侯爵邸と向ひあつてゐた。

「ほら、——此處から眞正面に見えるホールの入口のところに大きな石が見えるでせう」

庭園の奧にある、小さい流れの前へ來たところでN氏が立ちどまつた。「あそこが、大書院

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com